第61回 九州遊会 熊本地震から1年 ~伝える作法と伝わる手法~ 座談会 (2017/5/13 14:00~16:00 熊本益城町・阿弥陀寺)

ゲスト:大谷義文さん(益城町/阿弥陀寺住職)

吉岡 潤さん(西原村/文化創造館「風流」)

松本博孝さん(南阿蘇村 ※現在は熊本市在住。光澤大志さんの叔父)

参加者:光澤大志さん(熊本市出身・福岡市在住/看護師)★チューター

門倉正美さん(福岡市在住/元大学教授・哲学専攻・留学生の日本語教育)

三苫麻里さん(福岡市在住/主婦・塾講師)

新部健太郎さん(福岡市在住/中国武術講師・易者・舞踊家)

北原保幸さん(福岡市在住/行政書士・武道家[空手])

中野由紀昌(福岡市在住/エディター)☆主宰



昨年4月14日、熊本で地震が発生してから一年以上経過しました。九州遊会では地震発生から2週間後、臨時の会を開催し、福岡と熊本を往復して支援活動をしていた光澤大志さんに、報道だけでは知り得ない熊本地震の実態を話していただきました。

今回の地震で印象的だったのは、テレビ、新聞、ラジオ、インターネットニュース、SNS など多様なメディアを通して、内容も質も様々な情報が大波小波で押し寄せてくるように届いたことです。 亀裂の入った道路や崩壊した崖の映像、避難所の様子から、救助活動やライフラインの状況、そんな報道の合間に何度も急にさし込まれる緊急地震速報の心臓破りの音。その都度届く心配の声、デマや噂、遠方ゆえにやりきれない思いも、まぜこぜで押し寄せてきました。それはテレビや新聞のマスメディアからの情報だけでなく、パソコンや携帯、スマホといった日常的に使っているツールが多種多彩になってきていることも起因しています。

こうした状況で求められるのは、発信側の情報ばかりに寄りかからない、受け手の構えではないか。かつ、この地震の経験を忘れることなく、後世に伝える必要があるのではないか、と感じています。

そこで今回は、2本の柱を立てて座談会を企画しました。ひとつは地震を通して考え直すメディアの利点やデメリットについて、もうひとつは震災の記憶と伝承についてです。ゲストは 益城町、南阿蘇、西原村で実際に地震に直面したお三方です。

■震災直後における情報の"命綱"

【大谷】前震の14日は京都にいました。その時はまだ熊本空港は離着陸できたので、朝一番で熊本に帰ってきたら、もう台所がすごくて。調味料がこぼれるわ、ガラスが割れるわ。そして断水、停電。とにかく手探りで一生懸命片付けてヘトヘトになったあとの本震。前震のあと、あきらかに古い家屋の方は避難していたわけですが、まだ家はもつだろう、もう地震は来ないだろう、と思っていた方は家に留まってしまったので、怪我をされたり、被害に遭われたりされたようです。

とにかく、尋常じゃない揺れ。恐ろしかったですね。もう神様仏様って(笑)。なにがこの力を押さえられるんだろうと、まったく理解不能な状態でした。お寺の前に畑があるんですが、そこがお豆腐のように波打っていました。

あまりの横揺れでぼくがひっくり返ったんです。恐ろしいんで外に飛び出たら、外の道路がドーン!ドーン!と開いたりくっついたり。揺れている最中にも、今まで聞いたことのない音が聞こえてきた。翌朝、明るくなってから分かったんですが、家屋崩壊の音だったようです。揺れる、悲鳴が聞こえる、サイレンが聞こえる。でもそのサイレンが悲鳴をかき消してくれて。助かろうとか一切考えられない、恐ろしいのひと言でしたね。

最初は仏様に祈るような思いでしたが、揺れが長くて、その間にガシャガシャンという音と 悲鳴が聞こえたら、そんなことすっかり忘れて震え上がっていた。サイレンがそうした人工的 な不安をかき消してくれたんです。

【光澤】ぼくも熊本にいましたが、携帯のアラームがなりっぱなしなわけですよ。独特の耳を つんざくような音は不愉快でしたが、携帯アラームのほうがまだましだったんだなと。

【吉岡】西原村で文化交流館「風流」を開いています。ぼくは消防団だったので、地震直後から出っぱなしでした。よその地域がどういう状況であったか、知ることはできなかったですね。 益城はどうなっているんだろうと知りたくて。 大谷さんの話を聞いていると西原村は対照的ですね。西原村は人口が7000人ぐらいで、本当に村なんです。隣り近所も離れている。そういう状態なので、最初の地震があったときは家族といましたが、かなりの揺れだったので、とにかく集落の皆と一緒にいようと動きました。

西原村は集落で行動しようという習慣があります。年に5回の共同の草刈りがあったりね。 地域の消防やコミュニティがあるので、なにか起きたら、そこを中心に動こうという意識は自 然に働きます。とりあえず公民館か、近くに水源のある神社さんがあるので、どっちかに集ま るだろうと。今回は神社さんの横に小さなゲートボール場があるので、そこに皆が集まってい て話し合いました。

1回目のときは、いろんなものが倒れましたけど、そこまで被害はなかったので、とりあえず戻ろうということで自宅へ帰りました。2回目が来るなんて思いもしなかったけれども、一応ガソリンだけは入れておいたほうがいいかなと思って、翌日入れておいたので、それは助かりました。

ところが、2回目の地震は夜中。寝ていた部屋は荷物が全部倒れたので、狭い部屋に家族と移動して寝ていたところ、地面を踏み固めるダダダダダッとする機械があるじゃないですか。 あれを背中から当てられたような状態で、起きようにも起きられない。長いことダダダダダッと体が浮いている状態ですよ。体が浮いている状態の地震なんてはじめてでした。

地震がおさまったときに家族を外に出しました。ちょうど消防の班長という役をもらっていたもんですから、集落の皆が集まる場所にいって。でも、電気もつかないのでどういう状況かまったくわからない。道も通れない。携帯で連絡をとっていた人もいましたが、状況がつかめない。唯一、ラジオがあったので、AMラジオから聞こえてくる情報を教えてもらったり。

となりの集落が気になるからと、消防団の仲間と歩いていってみたら、隣りも不安な状況で 集まっていて。その集落は自衛隊のヘリで運び出されたところなんですが、不安だったので、 来てくれてありがとう、と感謝されて。

自分の集落に戻ってきて、その日から車で寝ました。ワンボックスカーです。足を伸ばさないときつい、というのは体験的に知っていたので。

それから、携帯のアラームは震源地だと遅いんです。地震がきてからビービーなるんですよ。 防災無線で役場から行事のお知らせなどが毎朝7時に流れるんですが、その防災無線からアラームが聞こえるんですよね。 地震のあとにそれが聞こえてくるので、またくるのか!と身構えていると、来ない。 防災無線は震源地は間に合わないんです。 だからもう、自分で判断するしかない。

【光澤】ぼくの実家も震源地から6~10キロのところにありますが、地震で揺れた後にビービー鳴りはじめました。結構離れないと先には着かないんだなと。

【**門倉**】予知はできない。

【松本】私は南阿蘇村に住んでいましたが、いまは熊本市西区のみなし仮設に住んでいます。じつは1月末と2月のはじめに、県で防災塾というのがあったんです。過去、熊本で大きな地震があったことも説明されたし、いつ地震がくるかわからん、ということは頭にありましたから、3月9日に突っ張り棒とか、転倒防止ライトを設置しました。そういう勉強をしたので、地域の住民の皆さんにお知らせしようと、資料づくりをぼちぼち始めていたんですが、間に合いませんでした。残念でしたけれどもね。

4月14日は、南阿蘇のほうも揺れましたが、震源は益城のほうだという。益城には叔母がおります。明くる日、20リットルの水タンクを5つ積んでもっていきました。そうしたら、家の中がひどいことになっていましたね。

余震はあるかもしれんけど、もうおさまったかなと思っていたところ、16日に本震。私は 建築関係の仕事をやっているもんですから、ブルかユンボかでぶつかってきて家を動かしてい るんだと。地震じゃないと思ったんですよね。

益城のように家と家が近くないんですよ。隣近所も遠いから、隣りの人の声も聞こえない。 スリッパで外に出ると、家の前が波打ってるんです。自宅は地盤ごと16センチほど傾いて 半壊という判定になってます。隣近所の家も建ってはいましたが、近所の方と「家の中よりも 外に出ておいたほうがいいかもしれん。どこかに皆を集めましょう」ということで、自宅の近 くに集まれる場所に8軒くらいの人が集まりました。

分譲地なので別荘や定住の住宅が70軒ほどあるんですが、そのうちの30軒ほどしか人がいない状態。ご近所さんと一緒に様子を見て回ったら、皆さん無事でした。1軒だけは腰をいためたようですが。

はたして避難所はどこなのか、情報が入らない。電話も通じない。朝5時ぐらいに、歩いて こられた消防団の方に状況を尋ねたら、道はガタガタでどこも出れんよと。

明るくなってから、四駆の車で行けるところまで行ってみました。割れた地面も越えられるところは越えていきましたが、中学校にしる、体育館にしる、行ける状態ではなかったですね。明るくなって、中学校に避難所を設けたという情報が届き、移動することになって。私のトラックに必要な分をのせ、道の地割れにはストーブで使う薪をつっこんだりして。そのとき女子高校生と小学2年生の子が手伝ってくれました。大活躍でしたね。

通った道にはスプレーを吹きつけ、後から来ても通れることがわかるように目印を残しました。主要道路だけは消防団、土木会社がざーっと道だけはつくってくれましたね。

阿蘇大橋が落ちたのは16日夜、ラジオで「落ちたらしいよ」と。私はiPadをもっているので、Googleで検索すると、崩れた阿蘇大橋の写真が出ました。わあ、本当だ、どこにも行けないじゃんと。

【吉岡】Google、早かったですもんね。うちの集落にも地震後3日、4日ぐらいに360度の車が来ました。

ぼくの集落には牧場の方がいて、ローダーというでっかい重機で石垣を寄せて道をつくってくれました。うちの集落には水源が二つあるんですよ。そこから村のほうへ配水するので、翌日には、すぐに役場の方たちが水をとりにくるわけです。そのときに、支援物資をこっちにもくださいよといったら、「いや、やれません」というんですね。避難所に来たら、渡せると。これがやっぱりすごく大きな問題だったですね。他のところも同じだったんですが、自主避難所には物資は渡せない。だけど避難所にきたら責任問題なので、そこに来た分に関しては責任をもって渡しますと。最初はみんないきり立って。なんでこういうときに自分たちばかり水をとりにくるんかい!やらんぞ!ということになってですね。

そういうこともあって、3日間は自主避難の状態で、皆で朝と夕の二食を炊き出ししてしのいでいたけど、婦人会もやっぱり負担で。集落で避難所に移動することになったんですね。避難所は中学校や小学校の体育館ですけど、集落ごとに移動したほうが安心感があるわけです。 集落のない新興住宅では、バラバラという感じでしたね。

大谷さんは避難所にいかれたんですか。

【大谷】いや、自宅は半壊でだめだったんですけど、ここ(お寺)は大丈夫だったので、できるだけ避難所にいかないようにしました。うちの友達と気心が知れている人だけここに寄ってもらって。ほかに頼ってきた人もいましたが、ここでは対応できないので無理にでも避難所にいってもらったんです。ご年配の方が多いので、なにかあったときに、ドクターや看護師を呼べないので。

【**松本**】言い忘れましたが、私のところは分譲地で行政区に入っていないから、区長も来ません。バラバラだから、少しまとめないかんと私がやりましたけどね。

■隣り組のあるコミュニティと自己責任

【光澤】お話をきいていると、やはり自主的に道路片付けたり、なんとかしよういう人が出てきているんですね。消防団も機能している。普段、消防団の活動をいやがる人も多いようだけれど、なにかあるとかけつけてくれる。

【松本】使命感みたいのはあるよね。

【門倉】消防団のようなものは、都市型の共同体にはないですね。それから自分で対処できる人もいない。自分たちでなにかできる地域と、自分たちではなにもできない地域とある。市街地との違いもあるでしょうね。

【大谷】益城町は田舎なので、やはり消防団が機能して、避難させたりしたんです。ただ、家屋が倒壊して人が閉じ込められているという状況で、土木業をやっている人が重機をもってこようとするんだけど、自衛隊が真っ先にきて全部ストップさせられて。善意だけでヘタに動いて崩れたりしたら、助かる命も助からないと。もう死んじゃうよ、というのに、待てと。結局4時間かかって、小さな機械を入れて、一つ一つ瓦礫をどかして。結局は亡くなってはいたんですけど…。はがゆい思いでした。

【門倉】それはジレンマですよね。時間がたっちゃうと、助かるものも助からないというのもあるから。

【大谷】重機を動かせる人は「任せろ」というんだけど、自衛隊は「待て」と。

【光澤】行政と現場の意識の違いみたいなものは、結構あったのかなと。ぼくの出身校である熊本北高校が、ひとり優秀なボランティアの方が入っていたおかげで、しかもTwitterで有名になったおかげで、全国各地から物資が集まってくるところで、熊本北高に集まった物資を、近くの小中学校に分配するポンプ機能が成立していたんですね。当然、避難の方々が何百人も来ていました。

ぼくもそこに物資を届けにいったんですが、役場の人にいろいる話を聞いたら、ここは近々 閉鎖する予定なんです、というんです。理由は指定避難所じゃないから。だから、避難の方々 には指定避難所にいっていただく。ここはあくまでも学校で、勉強するところなので、できる だけ早く学校を再開する予定です、といわれたんです。この非常時に勉強なんてやってられる のか、と思ったんですが、でもボランティアに入っていた人が、それはおかしいだろう、と役 場と交渉して、結局閉鎖にならずそのまま残り続けていたんです。 【門倉】役場の人も杓子定規的な対応と、臨機応変的な対応も出てくるわけだよね。それはね、阪神淡路大震災のときもそういうズレが生じていたし、3・11のときもそうだったみたいなんですよね。記憶と継承がされていないということ。どっちがいいかわからないけど、臨機応変でやれる範囲、やったほうがいい範囲とか、そういうノウハウが蓄積されていなかった、ということなんだろうね。

【新部】変にリスク回避しようと意識すると、かえって現場が硬直しちゃう。俺がやる、っていうのも止めなければ、まだ助かった可能性もあった。

【北原】行政と民間とのあいだに温度差があるだけでなく、市町村と県、国との温度差もある。 それが一体化できていない面はあるのかなと。国と県では組織が違います。ただ、それぞれの 責任問題があるから、保身という意味もあるでしょうね。

【大谷】震災直後なのか、後なのかでだいぶん違うと思います。震災直後の判断については、 吉岡くんの話なんかを聞いていると、やはり田舎のネットワークがあるんで、よしなんとかし てやろうと。経験があるからですね。都市化してくると、経験がない分、「ちょっと待て」と いう言葉に怯えてしまう。そこは行政の対応関係なく、「とっさのときにいかに救命するか」 ということにおいては、地域差ってすごく出るんだなあと。

【北原】隣り組のような活動を、普段からやっているかどうかですね。

【吉岡】田舎には自衛隊は入っていなかったんで、自分たちでやる以外にないというのは、逆によかったのかもと思いますけどね。

ぼくも東北の大震災のときに相馬市にボランティアでいったときに、役場や行政の対応を聞いていたんですね。やはり支援物資が集まっているけれども一切出さないと。なんでだと聞いたら、役場の理論としては、「1000人のところに100個のパンが来ても、住民の数分集まらないと渡せない」と。集まるまで待つんですよ。だけど待っている間に腐っちゃうわけです。役場の独特な平等理論を緊急時でも働かせるんですね。ぼくは、それはおかしいだろうと思うんです。

こういう地震があったときは同じようになると思ったので、今回の地震では、役場の支援物資が集まる場所に毎日通って顔見知りになって。たまたま社会福祉協議会の方が知り合いだったので、ビブス(背中に社協の名前が入ったチョッキ)を着て、いつでも支援物資が取り出せる環境をつくっておいたんですね。

当時は混乱するからということで、区長しか入れなかったんです。区長がとりまとめるので、必要なものをとりにきてくださいと。でもね、女性で生理用品が一つほしいといっても、区長との人間関係ができていないと、言いにくいですよね。だから、声を拾って、あいだをつなぎました。そういう動きをやっているのは自分ひとりしかいなかったんですけど、経験があったんで。毎朝通って、避難所になっている小中学校の運動場に車とめて寝泊まりしていた人に、必要なものがないか声がけして。

毎年、大阪の釜ヶ崎に炊き出しにいって、夜廻りパトロールをした経験が活かされたんだろうと思います。餓死する人もいるので。今回も、同じようなことをしているなと。

行政の支援を受けられない人もいっぱいいる。障害をもっていて、なかなか避難所に行けない人もいて。ぼくは「たんぽぽハウス」という障害福祉施設の理事もしていて関わりがあった

ので、そことも連携しながらですね。「たんぽぽハウス」もこうした状態だから、つながりのない障がい者も私たちが面倒を見たいから教えてくださいと、役場にいくんですが、個人情報だからと出さないんですよ。だから「たんぽぽハウス」は個人で一軒一軒訪問して、状況を把握しようと。個人で役場をやるようなものです。

役場は外からの対応で手一杯なんですよ。防災無線を使って、「ここに物資が集まっています」といった情報発信もできない。それじゃまずいので、知り合いが「防災無線を使わせてください」と役場にかなりプッシュして、時々は使わせてもらえるようになったりとか。そうこうしながら、活動が少しずつできるようになってきたというか。

【中野】お話聞くだけでも、じれったい。

【吉岡】確かに役場も対応だけで大変だから。できる人ができることをやらないといけない状態でしたから。

【光澤】盗みに入る人もいるので、個人情報を出さないのかもしれませんね。益城では詐欺や 盗みなどはありましたか。

【大谷】早速2日後には(苦笑)。警察の方から、「泥棒にとっては"大仕事が入った"といって、全国からこっちへ向かっている」と言われましたね。多分、ボランティアより早いんじゃないかと。警察は夜が手薄になるんで、消防団の若い子が10日間ぐらい見廻ってくれて。盗ってるかどうかは別として、不信な行為、行動をしている人がきている。「こら待て!」の声がずっと聞こえていました。ぼくは見ていないけど、荷物を車に積みこんでいたとしても、あの状況下では「おつかれさま」としか声をかけないと思うんですよ。また、消防団の法被を着て、消防団のふりをしてなにかをするのは実際あったようですね。

【吉岡】田舎だと普段見ない車が入ってきたら、やっぱり分かるんですよ。当時は消防団がずっと夜警をしていたので、そういう話も聞いていたし。夜集まっていると、県外の黒いワンボックスカーが空き家に入っていく。その家には物がないのは知っていたんですけど、一人が降りて中にはいっていった。今のは怪しかったよね、と話していました。不審者が入らないよう、道路にストップをかけたりしましたが、テレビ局の報道陣はなんとかして入ろうとする。制止しても、違うところから入ろうとするから、きつく叱ったりしましたね。

【中野】現場ではどんな情報がいちばん欲しかったですか。

【吉岡】やはり状況を把握できる情報ですね。どこら辺まで車で走れるのかとか。

【松本】インフラやね。

【吉岡】道路ですね。完全に寸断されているし、道が割れてるし、うねっているし。

【中野】どうやって、その情報を入手していましたか。

【吉岡】翌日、車で行けるところまで行ったり、行った人に聞いたりとか。

【松本】南阿蘇は、自家用飛行機のパイロット仲間が、東海大学の被災状況や南阿蘇の避難地 区の様子なんかを発信していたみたい。だからなのか、翌日にはプッシュ型物資が南阿蘇にも 届いていましたよ。

【中野】パイロット同士がアマチュア無線でやりとりするということですか。

【松本】この話は新聞報道で知ったことです。相当助かったようですよ。

【三苫】そのときドローンとか使えそう。

【門倉】道路状況を把握するには、ドローンは有効ですね。

【中野】新聞は発行されていましたか。

【**吉岡**】西原村は届きませんでした。

【松本】南阿蘇は毎日届いていました。熊本日日新聞がグリーンロードを使って、朝刊くれましたよ。いつからだったか記憶は定かでなありませんが、18日は朝から新聞よみました。避難所にどーんと置いてあったから。

【三苫】それでようやく状況を知ったと。

【松本】ある程度はですね。

【中野】そのときテレビとかラジオは視聴できました?

【吉岡】電気がないからテレビは映らない。だからラジオですね。乾電池の。携帯も使えるところはあったと思うけど、充電が切れてしまうから。

【松本】あとはショートメールですね。携帯の古い型のバッテリーを持っている方もいるんですね。そのバッテリーをお借りして、車の中で充電してあげるとか。旧式の充電器をもっていた方は相当貢献しています。

■ハブとなる人材がいるかどうかが鍵

【中野】吉岡さんのように班長の役目を担った人は、益城にはいましたか。

【大谷】益城は外から移住してきた方が6割を越えています。消防団も動いているけど、消防団の顔も知らないような状態。区長さんや班長さんが誰だかわからない。毎月のお金も一括で払っちゃっているからね。伝達の仕方もまったく違う。益城町は水が豊富で、震災後も湧き水がいっぱい出ていてたので、顔を洗ったり、トイレを流したりする程度ならなんとかしのげたのに、そういう情報を得られる人と得られない人の差がはげしかったんです。水が湧いていることすら知らないから、あたふたと避難所にいく。だから、西原村のように緊急時にパッと機能するような関係性が成立しない。

【中野】たとえば壁になにかを貼っておいて、それを見てもらうようにするとか。

【**松本**】避難所の壁にはずっと貼ってありました。クリーニングを無料でやってくれる店の情報とか。でも自主避難している人には、そうした情報はちょっと遅かったですよね。

【大谷】益城は地元の方ほど農家や古い家だったので、肝心な地元の方がほぼ100%被災して。 家が残ったのはこうして私たちのように後からきたほうで。地元の人は皆避難所いって、お互い知らないもの同士がここに残っちゃったりして。

【一同】ああ。

【大谷】うちに出入りしている地区の消防団の若い子が、気を利かせてオートバイや自転車で走り回って、知り合いがどこに避難しているか、怪我の有無などの状況を知らせてくれたりしました。もともと指揮系統があるんです。かえって私たちのほうには全然情報が入らないから。とくにお寺の檀家さんは年配の方ばかりで、安否確認がまったくできない。とはいえ、それは小さな情報で。

【吉岡】西原は比較的コミュニティがあるとはいいながら、でも、隣りの集落のことは本当につかめないんですよ。自分のところで手一杯で。役場の情報も入ってこないし、ボランティアさんから情報を拾ったりして、個人同士が連携して物資がわたる。そんな状況でしたね。

【中野】ボランティアセンターはスムーズに立ち上がりました?

【吉岡】西原の場合、ぼくが最初からその現場に立ち会ったんですが、いいかたちでできたと思います。

というのも、隣りの消防団の分団の班長から「大峯山から異臭がする」と聞いたので、この山は休火山だし、ひょっとして噴火するんじゃないかという危惧もあって。そこで同じ村に住んでいる熊本学園大学の先生に、「火山に詳しい人に調査してほしい」とお願いしたところ、たまたま福島大学の先生が福岡に発表にきているから見てもらうことになりました。熊本の調査団体にも来てもらい、消防団と一緒に山を歩いて調べたんです。どうやら土砂崩れで木がひっくり返ると、腐葉土の独特な臭いがするらしいですね。異臭はその臭いだろうと。土砂崩れも火山も、いまのところ大丈夫ということで安心しましたが。

結果、それがきっかけとなったんですが、学園大の先生が役場へ出向いて報告する際、たまたま西原村の副村長と出会ったんです。その二人が出会ったことで話はとんとん進み、副村長から「ちょうどいまボランティアセンターを立ち上げるところなので君が統括やってくれ」ということになって。そういう流れもあって、いろんなボランティアの方が入ってきたので、西原村がいちばん受け入れがよかったといわれましたね。

【中野】ボランティア活動されている方は全国各地にいかれているから、ボランティアセンターの受け入れ体制の差がよく見えてしまうようですね。

【光澤】ボランティアは受け入れ地域の制限をどこでもやっていますね。 熊本県内の人だけ受け入れるとか。 西原村はかなり初期の頃から全国からのボランティアを受け入れていました。

【松本】南阿蘇は、4月28日からボランティアのニーズ受け入れがはじまりましたね。その翌日からボランティアさんが活動をしはじめた。それまでは自衛隊と警察が主ですよね。

【大谷】入れるような状況ではなかったですよね。

【松本】3日目には自衛隊の風呂ができましたからね。

【吉岡】そうですね、早かったですね。

【松本】うちの家内が一番最初に入れてもらったんです。体が不自由だから。「お前よかったな、いい記念やな」って(笑)。電気がついたのが、19日の夜。だから3日目の夜に避難所に電気がつきましたね。各個人の家はまだずっと後ですけどね。

■他を知り比較するための情報源

【中野】離れた場所にいる私たちは、その間、テレビや新聞、ネット、SNSで状況を知り、判断するしかありません。熊本に近い福岡とはいえ、全国版のニュースで状況を知るしかなかったわけです。被災された皆さんは、どのようにテレビや新聞のニュースをご覧になっていたのでしょうか。

【松本】南阿蘇だと、熊本日日新聞が2日目には自宅付近を歩いて取材していましたね。皆と言いよったのは、「報道陣がどの人かわからんから、皆さん、名刺はもらいましょうね」と。熊日の旗を立てた状態できていたわけではないから、「こっちから寄っていって、どういう人か確認しよう」と話していました。私も取材を受けましたので、いま水が足らないとか、帰ろうにも水がないので洗濯もできないとか、言いましたね。大志(光澤)くんが訪ねて来たとき「なんが足らんね」というから、自宅におる方は洗剤がないよね。だから、悪いけど避難所にやらんでうちの地域ともうひとつの地域に分けました。食器もそうやし、体も、洗濯もね。避難所に持っていくと、誰の手に渡るかわからんから、本当に困っている地区のもんに分けました。そうさせてくれって、いうたもんね。

【**吉岡**】ぼくはもともと新聞もテレビもない家で、避難所にテレビがついているのを見るぐらいで。ま、そんな暇もないというか。そんなに期待もしていないというか。

【中野】取材も受けました?

【吉岡】まあ、取材陣ではなくて、たとえば、安倍昭恵さんとか、国会議員の方々とか、議員さん関係の対応が多かったですね。1週間目ぐらいからだったかな。ぼちぼち、いろんな党派の方々が来て。ああ、テレビで見たことのある議員さんが来とるわいと。それからいろんな有名人がおいおい来はじめたりとか。

【松本】でも、それどころじゃない。

【吉岡】マスコミはどうしても印象的な、視覚的に訴える場面をもってきたがるじゃないですか。別にそれで、そういう風な働きにしか。細かいところまでは当然無理だし。でも、よそが

どうなっているかを知るにはやっぱりいい情報源だったというか。震源が益城だったと知った としても、行きたくても行けないし。

【中野】状況を把握するには。

【吉岡】はい。橋が崩落していると聞いて、ええ、あそこの橋が落ちてるんだと。

【中野】そこではじめて被害の大きさを再認識したり。

【吉岡】そうです。自分の住んでいるところしかわかんないけど、テレビがついたときに分かる。ああ、うちだけじゃなかったと。あそこに比べたら、というのは多かったですよね。うちにしろ、やっぱり全壊に比べれば半壊。半壊に比べれば一部損壊。だからまあしょうがないよね、みたいな。

【中野】他と比べるという意識が働く。

【吉岡】そうですね。まだ、生きているだけでいいよねと(笑)

【松本】それはあったね。

【中野】新聞やネット、SNSなど、ありとあらゆる方向から情報が流れてきて受け取るほうは混乱します。そもそもマスコミが届ける情報と、地元から発信される情報は、対象となる視聴者は異なると思っていたほうがいいのかもしれませんね。

【大谷】直後と、時間がたった後とは分ける必要がある。直後だったら、やっぱりマスコミの映像ってある面、安心にもつながって、うちだけじゃなかったのか、と俯瞰できた。それから西原村から益城は見れないかもしれないけど、益城からは西原村の様子がテレビで見てとれた。そういうのを見て、安心して、がんばろうと思えたのは、直後にはよかったですね。だから直後での混乱は、そんなになかったと思うんですよ。

むしろまわりのほうが混乱している。では、ひと月後もそうなのかというと、こっちに余裕ができるからいろんな情報がはいりすぎちゃって。そこで混乱するっていうのはあったと思うんだけど。だから、ひとくくりにまとめちゃうのは厳しいかなと。

【吉岡】当時は本当に忙しすぎてね。地震後、初めて熊本市内に降りたのは6月ぐらいで、それまで動けなかったですね。

その前に、知り合いがボランティアでお風呂に入れない年配の方や障がい者の方を山鹿の温泉に招待したいというような、いろんなボランティアの依頼がずっと届いていました。それを個人でコーディネートしていたんです。そのときに山鹿のほうにボランティアのために一緒にバスにのって行ってみたら、山鹿って"普通"だったんですよ(笑)。西原村もブルーシートがあって、電気がまだこないというのがあたりまえだったのに、隣りの山鹿にいったときは、普通にお店が開いているし、「あれ、なんか不思議だな」って。

【中野】日常のままだったってことですか。

【吉岡】いまある日常ですね。当時は毎日600食の炊き出しをするのが日常だったけど、よそはそうじゃないんだと(笑)。そのギャップがおもしるいというか、不思議というか。そういう話はうすうす聞いてはいたんですけど。

【光澤】本当に差が大きかったんですよね。益城とか西原村とか南阿蘇が一番ひどかったけど、 実際いってみると、他の地域はそこまでなくて。

【松本】南阿蘇の避難所の炊き出しも、女性達による炊き出しは2日間ほどかな。パンやおにぎりが届くんですよ。だから他の避難所と同じものを同じぐらいに食べましょうと。どうしても炊き出しはご馳走になるから。

【吉岡】 避難所のほうに食べ物とかいっぱいくるんだけど、パンとかお菓子とか加工品ばかりで、あったかいものが食べられないんですね。そうなってくると、やっぱりあったかいご飯とかみそ汁とか、生野菜や果物といった生のものが食べたくなるんです。

避難している人のところにまわって要望を聞いて、Facebookとかで、いまブルーシートがほしい、なにがほしいとか伝えて、直接やりとりしてできたのが、ある意味よかったなあと。タイムラグはありますけど、必要なところに必要なものが届いた。そうやって全国の知り合いと連携できたのは本当にありがたかったですね。

ぼくが持っているメディアはFacebookと携帯しかなかったんです。携帯をずっと耳から離せないぐらい、ずーっとやりとりしましたね。もう相当、電磁波で頭やられてるわ、と思いながらですね(笑)。ずっと携帯も持たない主義だったので。でも、ちょうど地震の一ヶ月前に、消防団の班長をやっているなら携帯持て、とずっとプレッシャーをかけられていたんで、しょうがないと持った一ヶ月後に。おかげで助かった部分はあります。

【三苫】携帯は電波状況や、充電の問題もあったでしょうけれど、どれくらい時間が経ってから通じたのでしょうか。

【吉岡】途中、充電ができなくなってしばらく使えなくなった時はありましたけど、そういう時期は使う必要がないというか。忙しくて。

【光澤】基地局の鉄塔が倒れて、圏外になったことはなかったんですね。

【吉岡】なかったですね。当時は「五ヶ瀬自然学校」のRQ(アールキュー)の九州事務局が機能しました。RQはレスキューの略で、東北の震災のときに立ち上がったものです。隣りの県が中継地点になってサポートするっていうシステムがあったんです。知り合いが五ヶ瀬自然学校を請け負うことになって、直接、彼とやりとりしながら、どういうボランティアが必要なのかも見えてきました。そこからの支援で、ログハウスを全壊したお宅とかに無料で設置しに来ていただいたりとか。

■実情は現地にいかないとわからない

【中野】熊本歴史文学館で、『震災の記憶と復興エール』という企画展があって、これまでのいるんな地震の記録をした古文書が展示されているのと同時に、漫画家からの「熊本がんばれ」といったメッセージボードなどが展示されていました。

そのなかで、圧倒されたのは、熊本の方々から震災をもとにした俳句や短歌、川柳、肥後狂句で1000作品以上は掲示されていたと思います。いま起こっていることや心境を表現する手段として、短い言葉であそこまでリアルに伝えられるんだと。言葉がささってくる。とくに肥後狂句はインパクトがあって。お題があって、それに対して五七五で答える。季語は不要だけど、必ず方言を使うというルールがある。

たとえば、お題が「のさん」。 ※のさん:いやだ、たまらない、というような意味 のさん 復興しよる 揺さぶるな/のさん いつまで車泊 せなんどか のさん 着のみ着のまま 寝ています/のさん よその揺れにも 尻の浮く

次は「こん人」 ※こん人:この人 こん人は 震災弱者にゃ 寄りつかん/こん人も 震災弱者ば 忘れとる こん人は 震災弱者ば なめとらす

短い言葉で伝えていく。言葉として残るから、次の世代が読む可能性もあると。こうして残す ことは、大切だと思います。

【吉岡】メディアから伝わる言葉の受け取り方でいえば、最近よく記事やニュースでよく目にする「赤ちゃんポスト」は、本当は『こうのとりのゆりかご』という名称。ボランティアに来た方から詳しく話を聞いたんですが、「赤ちゃんポスト」という言い方はふさわしくないといって、していないんですよ。あれはメディアが違うところから引用して、わかりやすいという印象で「ポスト」を使っているんですね。発祥はドイツで、翻訳すれば「赤ちゃんシェルター」なんですね。

『こうのとりのゆりかご』はポストでなく、シェルターを使ったほうがいい。ポストというと、どうしても匿名性だけでやっているというように受け取られるけれども、そうではない。最初は『こうのとりのゆりかご』では、直接届けられたお子さんたちを養子縁組できると考えたけど、実は法的にそれができず、警察や児童福祉施設に預けなきゃいけないということになった。本当はしたくないことをしなくちゃいけない誤算があったということです。それ以前に相談があれば、どんどん養子縁組できるということなんです。

つまり現場を知らないと、メディアが出している言葉から受ける印象だけで判断してしまうことに、一般の人はなりますよね。言葉の使い方ひとつでイメージが決まる。「ポスト」っていうと、入れてそこでおしまい、っていう印象じゃないですか。そうじゃないですよね。その前後がある。やっぱりマスコミが発するニュースを見たときに、基本的には「知らない」という立場から見ていかないと、おかしなことになると、常々思っていますね。

【門倉】それは大事な問題ですね。ポストとシェルターでは全然違っていて。シェルターというのは守る、避難所という意味だから。マスメディアの軽薄なところが、言葉づかいにあらわれている。

【吉岡】マスコミは、情報を出すところだから。出した情報に対して責任があるから、あとはどうなったかを追跡して出していくのがジャーナリズムかなと思うけど、今はそういうのが少ないじゃないですか。森友学園のことも出てはいたけれど、あとどうなったかは消えてしまう。何兆円というお金がスイスのほうで日本円が消えたっていうけど、そのあと情報が出てこない。

気になる情報、大事な情報は途中で消えるという。そこらへんの責任の取り方が。マスコミにはスポンサーがあったりとか、いろんな利害関係がね。

イラクの人質事件(2004年、イラクに入国していた日本人3人がイラク武装勢力に拘束、自衛隊の撤退などを求められた事件)のときに、ぼくも本当に身にしみて感じましたね。いるんなつながりで、たまたま今井紀明君、高藤修一君のお母さんのところにボランティアを頼むといわれて、熊本から行ったんですね。

で、テレビから受けた印象というのは、今井君のお母さんが、「とにかく自衛隊を派遣しないでください」って感情的になっているところしか映像になってない。でも、あれを見ていると、「ああ、自分たちのことしか考えていないんじゃないか」っていうような印象を無意識のうちに受けちゃうんですよ。だけど、直接、今井君のお母さんにあったときは、「すいません、本当にうちのバカ息子がみなさんに…」という感じで、どこにでもいる普通のおばさんだったんですね。別に宗教色があるとか、政治色があるとか、そういう感じじゃなく、本当に自分の子供を心配している母親でした。そのときに、「無意識のうちにメディアに洗脳されとった」とハッと気づいて。勝手な思い込み、反射で判断していたと。本当に今井君のお母さんに申し訳なかったし、心の中でごめんなさい、とあやまって。どうしても視覚的な映像は本当にインパクトが強いので。

【門倉】どこを切り取るのかで、印象操作ができる。

【**吉岡**】映像をつくっている作家さんは、よく言われるんです。編集の仕方でどんなにでも印象が変えられるって。加工できるんですよ。そこは作り手でないと意識しにくいところでもあります。

【門倉】ものすごく大きな事件だと私は思っています。「自己責任論」といって、彼らは散々叩かれたんです。1990年頃、新自由主義がいわゆる先進主義諸国の中でだんだん浸透していくときのキーワードが「自己責任」でした。説明責任が必要というだけど、ここでも自己責任、自己決定がキーワードになっていく。経済的な面でも個人に責任とらせて、国家とか社会の保障は適当に切り上げるんだよ、みたいな。

【光澤】不思議ですよね。平和な時って自己責任だとかいうのに、いざこうして災害なんかが 起きたときは、自分でやろうとするとストップがかかる。自己責任なんだっていうんなら、自 分たちでやればいい。

【吉岡】そう。あのときもびっくりしたんですけど、じつは今井君、高藤菜穂子さんは、自分たちの帰りの切符を持ってたんです。その切符で帰るっていっていたのに政府はそれをさせなかった。とにかく色んな書類の中に、政府専用機で帰ります、というような一文をしのばせといて、名前書かせたんです。政府としては、自分たちが連れて帰ったんですよ、という絵を作りたかったんですね。ある意味騙されたんですよ。帰ってきたときに報道陣が詰めかけていて、高藤さんはなにがなんだかわからない状態で。それでしばらく相当バッシングを受けて、トラウマになってしばらくもぐってたんです。本当に政府ってえげつないことをする。

ちょうどぼくがその支援で入っていたときに、今井君のお母さんは「自衛隊をイラクに派遣すると殺されてしまう。だからちょっと待ってくれ」と、当然親として政府に要求したわけですよ。だけど、当時の首相は小泉さんでしたけど、そうやって政府に申し出た翌日に自衛隊を派遣した。国っていうところが、何をするところかっていうのは、本当に現場にいないと見え

ない。水俣病もそうですけど、国と直接身を以て対峙するってなかなかないですよね。それは 本当に貴重な体験だったなと。

【中野】水面下で行われていると、こっちではわからない。たとえば新聞の一面にある見出しと写真で、一瞬でなにがあったかをつかみますよね。こういう情報を受ける私たちも鵜呑みにせず「本当か?」と見る目は必要ですね。

【吉岡】ひと言で「被災者」といっても、100人いたら、100通りの被災があるわけです。そこに想像力を働かせていかないとわかんないですよね。その想像力はどこから来るかといえば、経験です。だから直接現地にきて、当事者と会うことが経験になる。直接性をもたないと、本当の情報は得られないとぼくは思う。全体を知るなんて、まずあり得ないから。

■強烈な記憶をどのように伝えるか

【中野】当事者に会って話を聞くことができればいいですが、たとえば明治に熊本で起こった 大地震の体験は、こういう書物や写真、絵で知るしかない。イメージを働かせていかなきゃい けないけど、どこまでリアリティを感じられるか。

これからなにかを残していく時に、どんな伝え方があるのか。たとえば東北のほうでは、「津波てんでんこ」っていう言葉がありますよね。津波が来たら、人のことは構わずとにかく逃げると。たった五文字だけでバッと伝わる。そういうのは九州にどれだけあるのか。

【大谷】明治22年に熊本で大きな地震がありました。益城地区では秋津川、木山川という川沿いに断層が走っていて。やはり地元の人の話をきくと、あそこには家は建てるな、というのが教訓だったんです。100年前にそこに断層が走っているなんて、誰も知らない。ただ、水がいっぱい湧いていて地盤が非常に緩いので、家を建てずにこっちに家を建てて向うで畑をする、というのが教訓だったんです。

ところが、だんだんそういうことが忘れられていくと、水の湧く近くに住むようになった。 人間の時間の単位でいくと、50年や100年なんて長いけど、地球規模でいったら(笑)。ああ、 平和だなーって暮らしていたら、ドカンとくる。

口承文化が途絶えたのは、戦後の70年、80年だと思うんですよね。今日のテーマは「伝える/伝わる」ですが、いくら情報がキチンとしていても、新聞の見出しがきちんとしていても、肥後狂句が残っても、写真や映像がのこっても、そこに語っていく文化がないと絶対に伝わらないですよ。

震災直後、光澤くんが阿弥陀寺にきて他の地区の話を聞いてはじめて、西原村の悲惨さがわかったし、熊本北高の精力的な活動がわかった。話していく文化の欠落というかね。そこは私たちが一番考えなくちゃいけないところだと思うんですよ。

ツールをいっぱい磨いても、これから起きるものは起きていく。そのなかでいかに語って伝承し続けるか。

たとえば、つい最近までタケノコの時期でした。でも、タケノコの食べ方を知らない若者が80%もいる。ようするにアクを抜くということを知らない。これって非常につまんない情報かもしれないけど、タケノコがせっかく生えているんだから、ちょっと米でもつっこんで沸騰させれば食べられる。そういう生きのびる知恵すらも伝わっていない。そういう身近なところを飛び越えて、メディアの方向にいくっていうのは、もうひとつ違う方向の勉強も大事なんじ

ゃないかと思いますね。それは、長期間かけて、100年、200年かけて取り戻していくべきじゃないのかなってぼくは思う。

だから、どんなものでも語る人がいないとね。実際に現場にいった人と話すとか。ぼくも、東日本大震災の後に女川にいったんですけど、地元の方に話を聞くと、ひいじいちゃんまでは、地震がきたらどうすべきかを皆知ってたんですよね。父親の世代あたりからのんびりし出してるんですよ。地震なんてこないだろうと。

【門倉】口承伝承が非常に必要で大事だっていうのは、強く同感します。さきほどの「津波てんでんこ」にしても、あれは東北の津波がくるところに全部伝わっているわけではなくて、ごく一部なんですよ。伝わっていないところは、もろに津波に巻き込まれたことが多かったんだけど、「津波てんでんこ」の伝承が残っている学校は生徒が無事だったとか。そこには口承で伝える努力がなされていたか、もしくは「津波てんでんこ」がひいじいさんから連綿と伝えられてきたかというと、そうではないという話もあるんですよ。これを伝えようとした地域学者がいたんです。東北の三陸海岸とか、必ず津波が100年周期でくるんだから、そういうところでは、地震が起て津波が来たらどうしたらいいのか、ということを伝える努力をしないといけないといって、小中学校を回っていってたんですね。それをまっとうにやっていたところが、「津波てんでんこ」を体得していた小中学校が無事だった、ということらしい。

【光澤】学校で避難訓練ってやるわけじゃないですか。そこに伝承を織り交ぜていくのは、必要なのかも。

【大谷】昔は夜、子供が爪を切っていると、じいさん、ばあさんが、夜中に爪切ってると親の死に目にあえないぞと言っていましたよね。それを裏返せば、夜中に爪切りまちがえて指でも切ったら治療するお医者さんなんていないから切るなよと。さっきの肥後狂句も一緒で、あの人は私を避ける、あの人は私を見ない、というのも、そういう裏付けが語られていないと、あの言葉だけいくら残っても、今の私たちがつきささっているだけで、50年、100年先の人にはまったく突き刺さらないと思う。映像も一緒だと思うんですよ。

【光澤】物語や背景とかも、一緒にセットでやらないと効果がないんだろうな。

【大谷】まったくそこらへんが欠けてきているのと、さきほどおっしゃった編集作業というのと、やはり平行にしていかないと偏るとやっぱり、どっちも長続きしない。

【三苫】前後にはさまっている文脈や物語を伝えないと、感情が伴わないし、想像力も喚起されない。だから映像も言葉も、切り取ったところだけみても、取り間違える危険性がある。

それこそ人質事件もその報道や映像だけみたら…。今のシリアにも、一生懸命惨状を訴えるために発信している人もいるけど、その映像だけ見たら、あれ、意外に元気なのかな?とか、あまりに悲惨なせいで、自分で悲しみをこらえて明るく言ってるのかもしれないな、とか、いるいる考えてしまう。ある部分だけ見たら、その前提がわからない。

【大谷】イラク人質事件のことも、吉岡くんが話してそういうことだったのかと、はじめて知った。うわべだけしか見てないと、マスコミの言葉に泳がされる。今は家族団らんの時間もほとんどない家庭も多いし。まして、こうしてちょっと都会化すると、隣りが何を食べているなんて知らないと。本当にこういうときに露わになる。

【三苫】「福島元気です」とマスコミも被災者側も元気なところを発信したりすると思うんですけど、その裏にあった大変さとか、下手に抜け落ちたりとか、逆に大変な部分、ショッキングな部分だけ強調されて、それ以外のところが見落とされているとか。なかなかちょっと難しいですよね。

【吉岡】マスの情報っていうのは、基本的に場所がないんですよね。地域に根ざしてない。そもそも根ざすのは無理なので。まったくメディアの様式が違いますよね。やっぱり伝わる言葉っていうのは、個人のつながりであったり、その場所に住んでいるからこそ伝わる。だから肥後狂句も熊本の方言がわからない人には、刺さらないですよね。

基本的に、そうした情報は地名にも残っているわけですよ。崩壊地形には、必ず「ウメ」とか「スギ」とかが使われている。昔、埋められたから「ウメ」。それを後の人が、ちょっとお洒落だから、漢字の松竹梅の「梅」を使ったり。

【大谷】 葦でも、悪しきの「アシ」なんで、アシをヨシに変えて、「吉原」になったり。ヨシとついているところはアシキところで、そういうところが沼地だった。

【光澤】ひっかかっちゃダメなんですね。

【大谷】笑。そういうところもある。

【三苫】芦屋は高級住宅街になってるけど。

【大谷】あそこは昔、葦が生えていたから、アシヤってね。本来ならヨシヤに変わっていいはずなのに、そこは旧名を残したという。

【中野】合併で名前が変わっちゃうと、その背景を断ち切られますね。

【吉岡】歴史が断ち切られますよね。

【大谷】こういう口承伝承がないとね。ところが今の若い子って言葉が少ない。「まじ」と「やばい」ばかり。この「やばい」の範囲がものすごく広くて、桜が咲いてもやばくて、散ってもやばくて。自分の父親が亡くなってもやばい。これだけ、ひとつの言葉でおわってしまうと、行間を読むことがないし、刺さらない。根本的な部分がね。

【中野】いまだったらニュアンスの違いはつかめるけど、これが100年後、言葉だけが残ったら、「桜が咲いたら危険だと受け取っていた時代があった」なんて誤解されてしまうかも(笑)

【松本】記念碑なんかをよく置いているけど、ああいうの、見てすぐわかるよね。これまで津波がここまで来た、とかね。洪水はここまであったよとか。活断層がここにあったよとか。地割れがここにあったよとか、残してもいいんじゃないかと。

【光澤】記念碑って結構、石の種類でボロボロになっていたりするから、あれはしっかりした ものじゃないとダメですね。 【大谷】いま、「桜3 1 1 (サクラサンイチイチ)」という陸前高田のグループが、津波の到達点に桜の苗を植えて、将来そこに桜の花が咲いても、昔そこまで津波がきたんだよ、ということを忘れずに、ということで。ところが、たった6年しか経っていないのに、桜を植えたことが語られていないから、植えられている理由がわからない。語られていないと、どんな奇抜なモニュメントや大木があっても、なぜそうなったのかを語り繋ぐ文化がないならば、「大きな木だな、やばい」で終わる(笑)

【新部】口承伝承の連携が必要ですね。

【大谷】顔を見るとか、心を交わすってことが少なくなってきているよね。だから、お互いに会って、元気だよ、っていっても、お前、言葉とは裏腹に、そうじゃないだろって察する心がなくなってきている。

【新部】見てわかりますからね。

【中野】特定の人が語り部になるんじゃなくて、みんなで語り繋ぐことが必要なんでしょうね。

【大谷】そう。だから、こういう座談会は意義があることじゃないのかなって思うんですよね。 こうしてやらないと、お互いに意見交換できない。

【三苫】経験の蓄積についても、地震に限ったことじゃなくて、日常の中の危機と向き合うことも経験につながっていく。たとえば、吉岡さんが釜ヶ崎で派遣労働の人と接してボランティアされたりとか、そういう経験が活かされていたわけですよね。障がい者の人が見過ごされているというのも、平和の中にある危機だろうし、そういうのは普段から見る目みたいなものが必要というか。

【吉岡】じつは一番弱いところが、〈最先端〉なんですよね。病者であったり、障がい者であったり。変革は遠いところ、弱いところからはじまる。そこは変わらざるを得ない。障がい者施設の「べてるの家」は、病気の価値観を完全にひっくり返しました。結局は、この日常をどんな風にとらえるか。やっぱりこの震災後、ゼロベースにとらえる重要性を実感としてすごく感じますし、できるようにもなりました。いい経験をさせてもらいました。

これからの問題として大事なのは、自治だと思うんですよ。自分の住んでいる地区を、どんな風につながりあって生きていく環境をつくるか。そのひと言に尽きるんじゃないかと思います。

【門倉】先日あった熊本県立美術館でのシンポジウムで、歴史学者の人が、江戸時代の大地震のときに、復興計画をどうやってたてたのか、という話をされていました。そのとき、江戸時代のほうが今よりも進んでいるんじゃないかってね。というのも細川藩が、地元の人に復興計画を立てさせたというんです。地元がこれだけの損害を受けているから、これを復旧させるためには、これだけのものが必要なんです、という声を各地元から吸い上げてね。そのとおりできたのかはわからないんだけども。そのように細川藩は自治を尊重しながら対応した。

【光澤】トップダウンじゃなく、あくまでもボトムアップで。

【吉岡】さきほどRQの話をしましたけど、じつは神戸の震災以前から、防災という関わりでやろうとしていて。北前船の拠点となった港は、今もなんとなく連絡しあっているんです。なにかあったら、隣りの港から連携するっていう意識がある。それをつなぐことで防災市というのを毎年やっていたんですね。それが今回、RQでも隣りの県を拠点に機能したんです。

【**門倉**】それはすごくおもしろい話だね。つまり地震という局地的な災害は、ちょっと離れたところは安全なわけだから、全部がやられちゃうっていうことはない。

【吉岡】そうなんです。だから東北のときも、近隣の県から連携して、それがすごく機能したってことで、今回も宮崎がそれを請け負ってということです。

【光澤】話もつきないところですが、時間もオーバーしてしまいましたので、これで終了となります。今日は貴重なお話を聞かせていただいて、有意義な座談会になったと思います。ありがとうございました。

以上